

## ○創立記念一二〇周年を迎えて

私たちの教会は、今から一二〇年前、一九〇四年の九月に、聖学院神学校の中の教会として発足しました。聖学院神学校が設立されたのはその前年のこととされます。アメリカで学位を得たデイサイブルス派の宣教師、H・H・ガイ博士は、一九〇三年二月、東京の本郷にある本郷基督教会に仮校舎を得て、聖学院の最初の学校である聖学院神学校を設立しました。三年後の一九〇六年には聖学院中学校が開校されています。女子聖学院もまた、一九〇五年に婦人伝道師養成の神学校として始まり、三年後に普通学部が併設されています。つまり、聖学院の男女両校共に、最初は神学校としてスタートしたのです。日本において教育事業を展開しようとするとき、まず初めに、伝道者を養成する神学校を設立したという事実、デイサイブルスの先達たちの思想がよく現されていると思います。キリストの弟子(Disciples of Christ)を生み出すための伝道の精神が、教育の理念の根底にあったのです。聖学院神学校は、設立の翌年、現在の男子の聖学院が立つ場所に

土地を購入し、新校舎を建てて移転します。その際、神学校の中に滝野川基督教会が生まれることになりました。現在の聖学院通り、男子の聖学院と女子聖学院の境界のところに「滝野川教会発祥の地の銘板があるのをご覧になったことがあると思います。実は、そこから一番近い聖学院の建物の中、講堂の入口手前のロビーの壁面にも、全く同じ内容の銘板が掲げて

### 【教会全体 一日修養会 主題講演】

『キリストの弟子として生きる

— 祝福を担う群れ・教会 —

東野 尚志 牧師

あります。こちらにもご覧になる機会があればと思います。「日本基督教団滝野川教会は一九〇四年(明治三七年)九月に聖学院の学院教会としてこの地に誕生した。最初の礼拝はアメリカの基督教会(デイサイブルス)派の宣教師H・H・ガイ博士によって設立された聖学院神学校の校舎内において行われた」と刻まれています。これは今から二〇年前、二〇〇四年一月

一五日の日付で、日本基督教団滝野川教会の名で掲げられているのです。聖学院と滝野川教会は一歳違いの兄弟(姉妹)のような関係にあると言ってよいかもしれませぬ。二〇二三年には、学校法人聖学院の創立一二〇周年が祝われ、今年二〇二四年には、私たち滝野川教会の創立一二〇周年が祝われているのです。改めて、その絆を大切に思い起こし、伝道と教育の

業における教会と学校の協力関係を深めていきたいと願います。

もともと、滝野川教会は発足から二八年後となる一九三二年、学院の外に出て「町の教会」となる決断をしたわけですが、そうであればこそ、それぞれ独立の立場から支え合っていくことができるのではないかと思います。背景にさまざまな事情があったとはいえ、その目指すところは一つです。伝

道地である日本において、キリスト教信仰に基づく教育の業を通して、伝道の裾野が広がられていくこととなります。教育の業を通して、信仰の種蒔きがなされているのです。在学中に洗礼を受けることがなくても、やがて年を経て、人生の経験を重ねる中で、かつて行った(行かされた)ことのある教会に足を向ける人たちも少なくありません。そして、そのような信仰的教育の働きを担う学校の中核には、信仰に立つ教育者の存在が欠かせません。教会がキリスト教学校の働き人を送り出していかなければならないのです。その意味で、伝道者を養成する神学校とキリスト教学校と教会は、運命共同体であると言ってもよいでしょう。共にキリストに仕え、キリストの弟子を生み出す働きを担っているのです。

#### 一 デイサイブルス教会の信仰

そこで改めて、日本の地に教会と学校を生み出したデイサイブルス教会の歴史をたどっておきます。聖学院も滝野川教会も、アメリカのデイサイブルス教会の日本宣教によって生み出されました。デイ

サイプルス教会は、正式には、**Christian Church (Disciples of Christ)**と呼ばれます。日本では、秋山操兄が書かれた『基督教会云(デイスイプルス)史』にも表わされるとおり、「基督教会」「デイスイプルス」と呼ばれることが多いと思います。この教会は、一九世紀初頭のアメリカにおいて、当時の長老派教会から分かれた二つのグループが合同することによって生まれました。

ひとつは、スコットランド系アイerland人である長老派教会の牧師であったトマス・キャンベルの運動に始まります。母国であるアイerlandの長老派教会が、他教派の会員が聖餐にあずかることを禁止する規則を作り、アメリカの教会においてもその規則に従うよう求めてきたことがきっかけになりました。トマス・キャンベルはその規則を拒否して、所属教派から距離を置くようになります。そして一八〇九年には「聖書が語るところで私たちは語り、聖書が黙すところでも私たちはまた黙す」という原則のもと、支持者と共にワシントン・クリスチャン協会を設立しました。信仰者一人ひとり

は神の言葉に縛られているのであって、神の言葉の人的解釈に縛られているのではないことを訴え、「教会は聖書に帰らなければならぬ。イエス・キリストの教会は一つである」と主張しました。同じくアメリカに移り住んできた息子のアレクサンダー・キャンベルと合流して、教会を設立していき

ました。もうひとつの流れは、同じ頃、カルヴァン主義の「予定説」や「ウエストミンスター信仰告白」に疑問を抱いていたバートン・ストーンが、「万人救済説」を説いたことが問題となり、やはり長老派教会から分離して、クリスチャン・チャーチを形成しました。このクリスチャン・チャーチが、キャンベル親子の運動と合流し、一八三三年にクリスチャン・チャーチ(デイスイプルス・オブ・クライスト)が誕生します。この合同によって、ストーンとキャンベル親子の運動

は大きく躍進して「聖書復帰運動」として勢力を拡大していききました。ふたつのグループに共通する信仰的な理念は、三つに要約することができます。

①超教派主義。教会は教派に分か

れることなく、ひとつでなければならぬ。

②非信条主義。教派や分派は、人間が作った信条を押しつけることによるのであって、全教会が認める簡略な信仰告白である「イエスはキリスト、我らはその弟子なり」に立つ。

③新約聖書主義。イエス・キリストのみを信条とするため、キリストを証しする新約聖書を重んじる。

教会政治としては会衆制度に立ち、個々の教会の自主性を重んじ、牧師も信徒も共にキリストのデイスイプル(弟子)であることを主張します。また儀式(聖礼典)としてバプテスマと主の晩餐を持ち、バプテスマは浸礼、主の晩餐(聖餐式)は主日の礼拝ごとに守り、牧師が不在の場合には、信徒が聖礼典の司式をすることもありました。デイスイプルスは、創立当初から道徳的に荒廃した中西部で伝道を展開していききましたが、一九世紀末から二〇世紀初めにかけての自由主義神学論争の影響を受けて、一九〇〇年初頭、デイスイプルス派とチャーチ・オブ・クライスト派(礼拝に一切の楽器を使用しな

い無楽器派)に分裂します。さらに、デイスイプルス派は、エキューメンカルな「デイスイプルス派」とファンダメンタルな「クリスチャン・チャーチ」に分離することになりました。

デイスイプルス派の教会は、一八八三年一〇月、ジョージ・スミス夫妻とチャールズ・ガルスト夫妻を宣教師として日本に派遣、秋田県を中心に伝道活動が展開され、一八八四年には、日本における最初のデイスイプルス教会として「秋田基督教会(現秋田高陽教会)」が設立されました。昨年は、デイスイプルスの日本伝道一四〇周年、そして今年、秋田高陽教会の創立一四〇周年の記念の年でもあります。戦時下にあつた一九四一年、合同教会としての日本基督教団が結成されたとき、基督教会は日本基督教団に加わって今日に至ります。以来、新約聖書だけでなく旧約聖書も正典として重んじ、聖礼典は牧師が司ることとしています。また一九五四年に制定された「日本基督教団信仰告白」を告白する教会として歩んでいます。バプテスマは浸礼、毎主日礼拝において聖餐式を行うという伝

統は大切に守りながら、日本基督教団の教会としての枠組みを重んじているのです。

日本では、デイサイプルス派の宣教により、聖学院や滝野川教会が生み出されました。また一九〇〇年初頭にアメリカで結成された「チャーチ・オブ・クライスト」も日本に宣教師を派遣して、静岡や茨城で伝道を行い、「キリストの教会（無楽器派）」を創立し、一九四九年には茨城キリスト教大学を設立しています。さらにアメリカのデイサイプルス派から分かれた保守派の「クリスチャン・チャーチ」も日本での宣教を行っており、「キリストの教会（有楽器派）」を設立し、関連神学校として大阪聖書学院を建てています。

## 二、デイサイプルス教会の伝統を受け継ぐ

今年、教会創立一二〇周年を意欲して「キリストの弟子として生きる」という年間主題を掲げました。ここに、私たち滝野川教会の原点があると思うからです。合同教会としての日本基督教団に加盟する以前、キリストの教会として設立されたとき、滝野川教会は

デイサイプルス教会の信仰に立っていました。洗礼を受けるためには、教会分裂のもとになるような難しい教理の学びは必要とせず、「イエスはキリスト、我らはその弟子なり」と十分としたのです。またかつての滝野川教会の礼拝堂を思い起こせば、長椅子の背にある聖書立ては、新約聖書と薄い讃美歌を並べて立てる奥行きしかありませんでした。旧新約聖書の合本を立てることを想定していなかったのかもしれませんが、ここにも、新約聖書主義の痕跡を見ることができます。あるいは、古くからの熱心な信徒の中から、なぜ旧約聖書を学ばなければならないのか分からぬという素朴な声を聞くことがあります。旧約聖書はユダヤ教の正典であって、キリスト教会は、キリストを証しする新約聖書だけ読んでいればよいのではないかと、というのです。これもまた、実際にデイサイプルス教会的な発想だと言つてよいのではないかと思います。

りも、体に染みついていて、いいのかもしれない。それに、特段の意識もなく、その伝統に基づく信仰と考え方をもち生きていくのです。だからこそ、私たちは、時折、自分たちが受け継いでいる信仰的伝統を自覚的に思い起こし、問い直す必要があるのではないかと思います。そこで、改めて高く評価されることもあるでしょう。しかし、人間の業はいつでも、時代や社会的状況の影響を受けつなされます。デイサイプルス運動もまた、一九世紀のアメリカの教会の状況の中で、信仰的なチャレンジとして始められたことを忘れてはなりません。時代や状況の変化に応じて、変わっていくこと、変えて行くべきことも生じます。最初に生まれた形をただ守り続けていればそれでよいというのではなく、教会もまた変わっていくことを求められているのだと思います。もちろん、状況だけを見れば、時代の波に流され、呑み込まれていくことになりません。しかし、私たち教会は、何よりも神の言葉によって導かれ生かされています。新しい時代の状況の中で、神の言葉が貫かれる

ためにこそ、教会もまた変えられて行く必要があるのです。ここでも、私たちに求められるのは、大木英夫先生が教えてくださったニーバー的な精神です。それは祈りの言葉として伝えられました。「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできるものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。（大木英夫訳）」ここに、必ず「大木英夫訳」と記されるのは、原文の祈りの順序が変えられているからです。ニーバーの原文においては、変えることのできないものを受け入れる冷静さが最初に祈られ、変える勇気はその後に続いていきます。しかし、日本的な諦念の強い状況においては、むしろ、変えることのできるものを変える勇気が大事だという理解から、大木先生は祈りの順序を入れ替えたのです。そこにも、状況を見る自由な精神が働いていると言つてよいと思います。デイサイプルス的な伝統もまた、日本

基督教団という合同教会に加盟し、全体教会である教団のもとにあって、変えるべきところがあったし、実際に変えてきたのです。

滝野川教会もまた、浸礼による洗礼と毎主日礼拝における聖餐執行という伝統を守りながらも、牧師のみが聖礼典を執り行うということや、日本基督教団信仰告白によって洗礼を授けるという点で、ドイツのプロテスタントの伝統を修正してきました。きちんと学びの手順を踏んでから、主日礼拝(聖日礼拝)において、使徒信条を告白するようになりまし。さらに新約聖書だけではなく、旧約聖書を重んじ、聖書研究会でも積極的に旧約聖書を取り上げるようになりまし。私たちはそのような変化を、積極的に受けとめつつ、「基督教会」が真の意味で、「キリストの教会」であるように、祈りをもって仕えていきます。教会は、キリストのものであり、キリストの支配のもとにあることを明確に表わしていくのです。

### 三、旧約聖書と新約聖書のつながり

旧約聖書の「旧約」は「旧い契約」を意味します。その中心にあ

るのは、エジプトを脱出したイスラエルの民が、シナイ山(神の山ホレブ)の麓で、神と契約を結び、神の民となったことにあります。

この契約に基づいて、イスラエルの民には神の掟である「十戒」が与えられました。神から与えられた「律法」を守り、掟に従うことよって、イスラエルは「神の民」としての内実を満たすことになるのです。

神の民には大切な「使命」が与えられていました。それは、すでに、アブラハム(アブラム)の選びのときに告げられた言葉の中にはつきりと示されています。主はアブラハムに言われました。「あなたは生まれた地と親族、父の家を離れ、私が示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民とし、祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福の基となる。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う人を私は呪う。地上のすべての氏族は、あなたによつて祝福される。」(創世記第二章一―三節)。大いなる祝福の約束です。人間が神の言葉に背いて罪を犯したことよって、世界と人間は神の前に呪われたものとな

りました。呪われたものを祝福へと回復するために、神はひとりの人を「祝福の基」としてお選びになったのです。

「祝福の基」という言葉は、新共同訳の聖書においては「祝福の源」と訳されていました。それがこのたび口語訳聖書で親しんでいた「祝福の基」という言葉に戻ったのです。ただし、原文を見ると「基」「源」にあたる言葉は用いられていません。アブラハム自身が、この世界に対する祝福となる、祝福を担うものとなることを示しているのです。そして、このアブラハムの選びは、息子イサク、またその息子ヤコブへと受け継がれ、アブラハムにおいて選ばれたイスラエルの民全体が、呪われた全世界への神の祝福を担うことになりました。直前の創世記第一章において、神を差し置き、自らの名を挙げようと天にまで届く塔を建てようとした人間が、言葉を乱され、全地に散らされたのに対して、神は、「自身の選びの民において、散らされたものたちを再び呼び集め、祝福にあずかせようと計画されたのです。」

しかしながら、選ばれた契約の

民の歴史は、神への背きの連続でした。世界に祝福をもたらす「神の民」としての使命は果たされませんでした。イスラエルは、その大切な使命を忘れ、自らを選びの民として誇り、神を知らず、神の律法を持たない異邦人を見下したのです。神は忍耐をもって、ご自身の民を導き、たびたび預言者を遣わして、悔い改めと立ち帰りを求められました。それでもイスラエルは神に背き続け、ついに、イスラエルは国家の滅亡と捕囚という苦難を経験することになりました。エルサレムへの帰還と神殿再建が許された後も、周囲の国家の侵入を受け、信仰の伝統が揺さぶられました。やがて、歳月を経て、ローマ帝国の支配下に置かれることになり、ユダヤの民衆の間に、民族の解放を求める「メシア待望」が高まりました。

神は、ご自身がお立てになった契約のゆえに、イスラエルの民を見捨てず、ユダヤ人の中に、ユダヤ人のひとりとしてご自身の御子を遣わされました。主イエス・キリストこそは、イスラエルのみならず、すべての民を救う「メシア」として来られた方です。ところが、

神が遣わされたメシアは、人々が期待した「栄光のメシア」ではなく、「苦難のメシア」でした。主イエスは、武力をもって敵を蹴散らすのではなく、むしろ、苦しめられる民に寄り添うようにして、自ら苦しみを担い、神の民イスラエルが踏み外した道をご自身の生涯を通して踏み直すようにして、神の言葉への完全な従順を貫かれました。そしてついには、ご自分の命を犠牲にして民の罪を贖い、罪の赦しの恵みを通して、「新しい神の民」を招集されました。

新約聖書の「新約」は「新しい契約」を意味します。イエス・キリストの犠牲によって立てられた契約を指しています。かつてイスラエルの民は、動物の血を流し、その命を犠牲とする罪の贖いの制度を与えられていました。しかし、それは、不十分、不完全な制度であり、動物の犠牲は繰り返されなければなりません。けれども、まことに神でありまことに人である主イエスは、ただひとり罪のないお方として、ただ一度、ご自身の血を注いで、永遠に罪の贖いを成し遂げてくださいました。「この方は、大祭司たちのように、ま

ず自分の罪のため、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。ご自身を献げることによって、ただ一度でこれを成し遂げられたからです。律法は、弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後から来た誓いの言葉は、永遠に完全な者とされた御子を大祭司としたのです。」（ヘブライ人への手紙第七章二七～二八節）。

主イエスは、ご自身の血を注ぐことによって、不完全であった旧約の犠牲の制度を乗り越え、完全な罪の贖いによる永遠の契約を確立し、これを新しい契約としてくださいました。そのために、十字架の死を目前にした、最後の晩餐（聖餐）を制定されたのです。「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これは私の体である。』また、杯を取り、感謝を献げて彼らに与え、言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される、私の契約の血である。』」（マタイによる福音書第二六

章二六～二八節）。罪のない神の独り子の血が流されることによって、罪の贖いが完全に成し遂げられ、救いの道が開かれました。ユダヤ人だけでなく、異邦人もまた、イエス・キリストを信じる信仰によって救われるのです。

イエス・キリストにおいて「新しい契約」が立てられたことよって、かつての契約は「旧く」なりました。新しい契約を受け入れないユダヤ教においては、かつての契約がなお古くない、唯一の契約です。新しい契約のもとでは、神を知らなかった異邦人も、イエス・キリストを通して、律法なしに救われるようになりました。こうして、ユダヤ教は律法遵守にこだわる民族宗教に留まり、キリスト教は世界宗教となっていくたのです。主イエス・キリストにおいて、神の国、すなわち、神の支配が始まっています。キリストの十字架による罪の赦しと復活による新しい命を信じる者は、誰でも救われるのです。

この喜ばしい知らせ、福音を広く告げ知らせるために、主イエスはかつてのイスラエル十二部族になぞらえるようにして、十二人の

弟子たちを使徒として任命されました。主イエスが、直接に教会を建てられたわけではありません。主イエスの十字架と復活、昇天を経て、天から約束の聖霊が降ることによって、教会は生まれました。しかも、そのとき、あのバベルの塔の混乱を乗り越えるようにして、聖霊が宿ることによって、言葉の違いを超えて、福音が通じるようになったのです。しかし、主イエスは、十二弟子を召し出すという象徴的な行為によって、新しいイスラエルとしての神の民、教会の召集を描き出しておられます。そして、ペトロの信仰告白を土台として、ご自身の教会を建てると約束されました。（マタイによる福音書第一章一六章一八節）。さらには、ペトロに天の国の鍵を授けると言われました。主イエスご自身が、その生涯においてイスラエルの民の道を踏み直し、ご自身の業を地上で引き継ぐ群れ、すなわち、祝福を担い、福音を宣べ伝える群れとして教会を召し出されたのです。

#### 四、新しい神の民としての教会とその使命

旧約聖書におけるイスラエルの

民の歴史を踏まえることによつて、新しい神の民として召し出された教会の祝福と使命もまた明らかになります。かつて、シナイ山の麓で、イスラエルが神と契約を結ぶとき、神はモーセを召し出して語られました。「ヤコブの家に言い、イスラエルの人々にこのように告げなさい。『私がエジプト人にしたことと、あなたがたを驚の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは見た。それゆえ、今も私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさつて私の宝となる全地は私のものだからである。そしてあなたがたは、私にとつて祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」(出エジプト記第一九章三―六節)。これがかつて、神の民イスラエルに与えられた祝福と使命です。この言葉を思い起こしながら、ペトロは、新しい神の民に向かつて語りました。「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の祭司、聖なる国民、神のものとなつた民です。それは、あなたがたを闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力

ある顕現を、あなたがたが広く伝えるためです。あなたがたは、『かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている』のです。」(ペトロの手紙第一二章九―一〇節)。

「選ばれた民、王の祭司、聖なる国民、神のものとなつた民」。私たちは、旧約の民と同じように、神によつて選ばれ、召し出されました。そして、神のもの、聖なる神の民とされたのです。ペトロは、特に、教会の「祭司」的な務めに注目しています。古来、キリストの三職に合せて、教会にも、王的な務め、預言者的な務め、祭司的な務めが求められてきました。教会は、王であるキリストの支配のもとにあり、キリストと共にこの世を治めます。またキリストによつて遣わされて神の言葉を宣べ伝える預言者的な務めを負っています。これは分かりやすいかもしれませんが、案外、見落とされがちなのが、教会の「祭司的」な務めです。ひと言で言えば、「執り成し」ということです。祭司は神と人との間に立ちました。神と人との間に立つて、この世の人たちに神を

示す。あるいは、この世の人たちに先だつて、その人たちの分まで代わるようにして、神の御前に立つ。そのようにして、神と人との間を執り成す務めです。教会は、今、神に対して、またこの世界全体に対して、そのような祭司の務めを負わせられているというのです。神のものとして召し出された教会は、この世界全体の救いのために、再びこの世に遣わされています。神の御心に背き、神を忘れ、神のもとから迷い出てしまつていくこの世界、呻きと恨みと欺きに満ち、罪の暗闇に閉ざされているかに思えるこの世界のただ中で、この世界を執り成しつつ、世界全体に先駆けて、神に礼拝を献げるのです。

この祭司的な務めの上に正しく位置づけられるときにこそ、預言者的務めは正しく担われるのではないでしょう。ただ上から、外から語るのではなく、この世界のただ中に身を置きながら、私たちが「闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある顕現業」を、広く伝え、証して行くのです。そのようにしてこそ、祝福の基(源)となる

べく召し出された神の民の務めを正しく担つていくことができるのです。

キリストの弟子は、師であるキリストご自身の業を受け継いで行くこととなります。執り成しと伝道の働きのために、祈りつつ仕えていく中で、ご自身の命を犠牲にして、私たちがすべてのために執り成してくださる主イエスをさらに深く知ることになります。そして、神から遣わされて地上に來られ、私たちに天地万物の造り主でありすべてを導いておられる父なる神を仰がせてくださった主イエスのことをさらに深く知り、証して行くのです。主ご自身が私たちと共におられ、私たちを遣わしてくださることを覚えて、与えられた使命に生きる群れでありたいと願います。

「だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によつて洗礼を授け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイによる福音書第二八章一九―二〇節)。